

○事業評価シートまとめ [青陵インパクト]

資料3-1

※「○」は評価できる点、「◎」は改善に向けた提案

評価の視点	評価	備考
○参加者同士の交流及び地域住民・団体との協働が、学習の中で促進されていたか		
○	広域から集まってくる中・高生が地域について学び、町内会について考え、自分の住んでいる地域への気付きを新たにするという深い活動。あえて青陵を選んだ理由もそこにあると感じる。ここでベースを作り、各地域でのアレンジも可能。	
○	意識の高い学校だけあり、非常に活発に討議されていた。その中でもお互いの発言を認め合い、決して否定しない姿勢は素晴らしい。また、中学生、高校生それぞれの学年の垣根を越えて話し合っている。	
○	令和元年度の市民参画型事業発表会をみました。大変まとまった意見を発表されていたので好印象でした。	
○	地域を離れての通学であるので町内会との交流は大変有意義に感じる。	
○地域活動への参画が可能となる事業内容・手法・学習プログラムとなっているか		
○	青葉区中央市民センター職員の進行、フォローがテンポ良く絶妙。参加学生の意欲を引き出している。	
○	カードゲームの言葉の改善は一つ一つ熟考して進めている。この作業により学生が町内会・地域を改めて見つめなおしている。	
○	中学生から高校生と幅広く意見を出し合える学習経験や地域活動への参加は市民センターを中心とした多くの学びとなる。	
○	まちづくりの多くの課題に気づき、意見を出し合える場所としての居場所にもなると思う。	
◎	拠点館として対象者を青陵中等教育学校の生徒に限定し連携先として選定するという事に違和感を感じる。	
◎	国見三丁目の町内会との交流であったが町内会の本来の地元の中学生とも交流を持つべきではないかと思われる。	
○市民センターが参加者の活動の場・居場所としての位置づけになっているか		
◎	定例会を青陵の校舎で行うのは居場所としての市民センターの役割を果たしているのだろうか	
○事業により参加者の意識、行動がどのように変化したか		
○	参加学生が「日本・韓国・イギリスの町内会(自治組織)比較」という論文を書いている。公民教育にも触れ、高校生がテーマとして興味を持ってくれたことは感嘆した。	
○社会的波及効果は期待できるか		
◎	カードゲームの中身と製作過程が大変素晴らしい。実際にどこまで各地域で浸透させることが出来るかが課題かと感じる。関わった全ての人々がメッセージャーとなり、各市民センターでの活用、ジュニアリーダーへの活用、、学校、児童館などへの働き掛けが必要になる。渡しただけでは伝わらない。	
◎	自分の地域オリジナルの内容が加味されていくと親しみが湧き自分事としてとらえられるようになる。	
◎	コロナ禍、地震などの状況で内容が変化していく。丁寧にすくい上げながら持続可能な取り組みとしてとらえてほしい。	

評価の視点	評価	備考
その他の意見		
—	<p>制作過程はよく理解できた。実際にカードゲームを子どもたちが行っている場面を見たい。近隣町内会の協力を得て製作に活かしているが、町内会毎に特色や地域性があり、ひとくくりには出来ない。学生ならではの気付きがあるが、それが正しい理解とも限らない部分がある。情報源になる町内会が1つではなく、2～3ヶ所あると良いのではないかと感じる。さらなる発展を期待している。</p>	
—	<p>現在コロナ禍で活動に制限はありますが継続できるものにしてほしいです。</p>	

○事業評価シートまとめ [子どもボランティア事業 チャイルドボランティア「チャボ!」] 資料3-2

※「○」は評価できる点、「◎」は改善に向けた提案

評価の視点	評価	備考
○参加者同士の交流及び地域住民・団体との協働が、学習の中で促進されていたか		
○	募集はメールで配信して募る。4年生から声かけをしており6年生が多い。他校生との情報交換を楽しそうにしているとの事。	
○	年間を通して遠見塚小学校、南小泉小学校、南小泉中学校の間での異学年交流、地域の団体(あかねグループや仙台白菜)の支援、地域のごみ拾い、ピーチクリーン、育樹会、ジャガイモの収穫、震災遺構の見学(令和元年度実績)などを通して多くの団体との協働がある。	
○	シルバーボランティア「学びごっこ」から絵手紙の指導を受け、「あかねグループ」の協力を得て高齢者へ宅配する弁当に添える手紙書きの活動を行っている。農業園芸センターで「仙白園」の大学生らとともに畑に種を植え収穫している。このように各種団体と協働することで、その必要性への理解を深めている。	
○	・参加者は複数校の小学校児童と中学校生徒だった。活動を通じて学校や学年の垣根を全く感じさせない、参加者同士の濃密な交流があり、高く評価できる。 ・地域のジュニアリーダーや地域づくりにまい進する大人たちと共同で行う、多様な活動メニューが用意されていた。	
○	小学生から中学生、幅広い年齢と他の学校などの参加でしたが同じ目的を持って活動していることで、わきあいあいの雰囲気の中、活動を通して自己肯定感にもつながっていくように感じられました。	
○	震災を機に子どものボランティアとして地域のために何ができるかを意見を出し合える場が市民センターであることは素晴らしいとおもう。	
○	地域や関連施設との連携ができていて、一定の理解と評価を得ているものと推察します。引き続き発信を行い尚一層の地域との連携を求む。	
○地域活動への参画が可能となる事業内容・手法・学習プログラムとなっているか		
○	地域支援としての仙台白菜づくりも行っている。町のごみ拾いは子供達が前もって地域のリサーチをして臨んでいることから、参加する喜びと地域のために貢献するという意識が高い。	
○	多様な地域活動に積極的に参加しているほか、お弁当に添える手紙の作成や、地域を元気づけるダンスソングの作成など、子どもたちみずから、地域に働きかける手法がとられている。また、手紙の返事をもらうなど、双方向的なやり取りも実現できている。	
○	親しい人に手紙を書くという日常的な行為から、地域の高齢者へ手紙を書くということは、子供たちにはハードルが低く、また地域の清掃活動も同様であって、地域活動に参画しやすいものとなっている。	
○	福祉事業として高齢者に配布するお弁当の一つ一つに各自が個別のメッセージカードを作成し、見えない相手に思いを寄せたり、地域にゆかりのある白菜づくりの収穫イベントに連携参加したり、地域活動への参画を主題としたプログラム内容だった。	
○	収穫作業も視察させてもらいましたが、住民の方々と話をしながら収穫している様子に日頃の交流が感じられました。子どもたちの楽しそうな表情に加え、住民の方々が活動を楽しんでいる様子が印象的でした。	
○	7年前にヒアリングさせていただいた時子どもたちは誰かの役に立つことができるのは楽しいと言っていました。無理のない活動の中に多くの気づきと学びがあるので9年続いているのだと思う。	
○	清掃活動や高齢者へのお手紙など、積極的に地域に参画できるプログラムになっている。	

評価の視点	評価	備考
○市民センターが参加者の活動の場・居場所としての位置づけになっているか		
○	毎月定例会のような位置付けをしており、子供達が待ち望んでいる様子から子供達の居場所になっている。(毎月チャボの手紙を書いている)子供達の声繋げて作った「チャボソング」とダンス。(青葉区のダンスを見てチャレンジした。)	
○	参加者である遠見塚小学校、南小泉小学校、南小泉中学校の生徒の活動の場・居場所になっているといえる。	
○	子供たちが定期的に土曜日の午前に市民センターに集まり、高齢者に渡す手紙を書いたり、様々な事柄を話しあい、そこで新しいアイデアが生まれたりして、活動の拠点として機能している。また中学生の多くが小学生の時から継続して活動していることも居心地の良い場所であることの裏付けになっている。	
○	若林区中央市民センターが、参加児童の心のよりどころになっており、飾らず、仲間と和気あいあいとしている様子がうかがえた。	
○	・目的を共有して活動を行える場は学校・家庭とは違う形の居場所になっていると思う。 ・コロナ禍の中、配慮しながらの事業で大変と思うが素晴らしい活動につながっていると感じた。	
○	野菜や花を育てることで市民センターへの居場所としての愛着であったり防災や地産地消などのまなびにつながる。	
○	市民センターの職員始め協力体制が確立されている。	
○事業により参加者の意識、行動がどのように変化したか		
○	・地域の人と昔遊びをしたい、など、自分達から発信！町に高い関心を持つようになった。「チャボ」としての誇りも持つようになった。 ・チャボの活動と集まりは親と学校の先生からの信頼を得ている。	
○	体験を重ねるだけでなく、地域を元気づけるダンスソングの作成など、参加する生徒が自発的に考えて行動するプログラムになっている。	
○	・子供たちから手紙がどんな高齢者に届いているかを知りたいという話が出て、実際に高齢者に手紙を届ける取り組みに繋がり、また宅配弁当の献立を調べカロリー計算をして、高齢者に情報提供することも行い、活動の幅が広がり質的レベルアップとなった。 ・地域の清掃活動では事前にゴミが落ちている場所を調査して事前準備を行うなどして創意工夫がみられる。	
○	2020年度10月の成果として、参加者自身でテーマソング『地域を元気にするチャボ！ダンスソング』を作詞作曲してCDを作成していた。コロナの自粛期間に歌詞を集め始めて、形を成したとのこと。イベント日は随時、参加する子供たちがこれをCDラジカセで流している。これは事業や参加者同士への愛着の表れであると共に、活動を通じて地域と肌で共感する喜び、加えて、活動を通じて得た自信と誇り、など諸々の表れであると評価できる。	
○	事業の目的をきちんと理解しようと活発に質問をする様子が見られ他の意見も参考にしながら楽しそうに取り組む姿もあった。	
○	子ども達の感想を聞けば一目瞭然である。子どもの健全育成の為、引き続きご努力願いたい。	

評価の視点	評価	備考
○社会的波及効果は期待できるか		
○	身近な所から子供達が無理なく出来る事からやっていき、次の人達へ伝えていく、繋げていく事を考えている。	
○	この事業を拡大させるためには、参加者人数・規模、参加率などを考慮しながら参加者を募集する必要がある。現状では、適正な規模(22名)で運営されていると考えられる。	
○	手紙書きが高齢者を含めた住民へ元気を与えることに寄与し、清掃活動ではゴミを減らそうという地域住民への意識付けが期待できる。	
○	地域の個性に対する興味関心が芽生えている。また事業参加者は卒業後(?)に、ジュニアリーダーに引き続き加入するケースが生まれている。	
○	地域の方と事業することにより、地域交流も定着すると思う。	
○	継続することの安心感と積み重ねたものは社会的波及効果そのものだと思う。	
◎	参加人数が課題である。一人でも多くの子ども達に参加してもらう為の工夫やプログラムの構築に期待する。	
その他の意見		
○	例年5月に小学校にチラシを配布してメンバーを募集しているが、現メンバーのロコミ活動のサポートもあってメンバー集めに苦慮していない。これは、チャボの活動がメンバーには楽しいことであり、それが地域社会に伝わっていることによると思われる。	
◎	チャボ！ダンスソングは、成果報告会で見たカップダ川ダンスに触発された子供たちが自発的に自分たちもやりたいとして生まれたもので、そのダンスソングはレベルが高く、様々な場での発表を期待したい。他地域のこども参画型事業のメンバーと意見交換や交流をすることで、情報を共有したり、視野が広がり、相互に触発されて新たなアイデアが生まれると思われるので、他地域のメンバーと意見交換や交流ができることを期待したい。その際、チャボは他の事業と比較して歴史が長く、活動の質が高いので、積極的に指導的な立場になって欲しい。	
—	先生方のお話を聞いて、ただただ感動でした。この子供たちのこの様な取り組みの継続から 将来の良き町衆が育成され、持続可能なまちづくりに繋がっていく事に期待したいと思います。	
—	多種多様なボランティア活動の発掘に尽力している。令和2年度の4月以降は、新型コロナウイルス感染症にあって、高齢者への手紙作成など、状況の変化に合わせた適切な運用している。ポートフォリオの作成やICTの活用など、運用のための工夫が優れている。このような成果の高い事業は、社会的に波及させ、他の市民センターでも積極的に展開されるべきであろう。	
—	・参加者の年齢層が小学校児童から中学生であることもあり、活動をコーディネート、下支えしている大人たちの包容力と力量が、事業の成否に大きく左右しているように思う。視察当日のイベントにおいても、コーディネーターの気配りや配慮、機転の利いた盛り上げ方など、頭が下がる思いだった。 ・子供対象の事業ではあるが、保護者たちの参加が増えるとなお良いと考える。当該事業の活動シーンが参加者の家庭で共有・共感されて、日々の共通話題になること最高である。事業活動において、自分の親たちが地域にかかわることは暮らしの一部であると体感できる、いわば「親の背中」の登場機会が多くなることも、とても大事であるように考える(これは現代社会において、極めて無理な注文と思われるが)。	
—	・高齢者のお弁当に添えるお手紙は献立を理解したうえで書いているのも印象に残りました。 ・お返事のお手紙を大切に嬉しそうに見せてくれる姿にこちらまで嬉しくなりました。	
—	震災の大変な時子ども達の心の癒しになっていたのではないかと思います。子どもたちの居場所になっていたと思われます。	

※「○」は評価できる点、「◎」は改善に向けた提案

評価の視点	評価	備考
○参加者同士の交流及び地域住民・団体との協働が、学習の中で促進されていたか		
○	コロナ禍で人々の交流が減るなか、17回ものミーティングを重ねて企画を練り上げていったプロセスは、参加者同士の交流を深めるものであったと考えられる。また、成果発表の場である「杜の美術セカンド展」では、多くの住民が足を運び、子どもたちと地域住民の交流が生まれていた。これらの点は高く評価できる。	
○	自分たちが住む地域の課題の気付きをもとに、つるっこ画樹園の企画・運営を市民センター、地域と協働し、大学生のサポート、小学生への声かけ等、協働の規模を広げていっている。	
○	参加者同士で絵の描き方を学ぶとともに、鶴ヶ谷の場所、人の魅力を探っていけること。また、画樹園を訪れて、絵や写真を目にした地域住民や団体の皆さんが鶴ヶ谷の魅力を新たに再発見できるよさがある。	
○	中学生たちが普段は交流のない地域住民から感謝の気持ちや感想を多くもらったと満足そうに話していた。またイベント会場では大学生や担当職員と中学生が連携しながら運営していて、中学生が様々な世代の人と交流する機会にもなっていると感じた。	
○	地域の魅力を発信するために地域住民との交流を感じました。	
○地域活動への参画が可能となる事業内容・手法・学習プログラムとなっているか		
○	水彩画の描き方を学び、地域を題材とした絵を描くことで、子どもたちが自然と地域への関心を高め、地域活動への参画を促す構成になっていたと評価できる。	
○	鶴谷中学生の美術部と連携し、作品の出品を切り口として市民センター祭りに参画し、大人も子供も皆が楽しく交流する場を作れたことは、地域の方々から信頼を得ている。中学生も自己達成感を持てた。	
○	中学生にとって、身の回りの風景を題材にした絵画や音楽を通じて地域のことを知ったり地域の人とつながったりできる機会になっている。そしてそんな作品を地域住民が目にする事で、地域への愛着が深まるプログラムになっている。	
○	地域の方々には写真におさめ中学生は絵で表現するという形は地域活動の学習プログラムの一環となっている。	
○市民センターが参加者の活動の場・居場所としての位置づけになっているか		
○	企画会議を通じて子どもたちが市民センターに繰り返し足を運び、そこで多数の大人と出会うことで、市民センターが身近な居場所になったのではないかと予想される。	
○	館長さんや職員の考え・プラン・アイデア等をサポートされる中学生が自分たちの居場所として位置付けになっている。	
○	絵の一つに市民センターが描かれたものがあり、題名も「我が市民センター」とあって、それだけで参加者の楽しい活動の場・居場所としての位置付けになっているのがよく伝わってきた。	
○	コロナ禍で遠出ができない中でも中学生が市民センターを活用して身近な場所でイベントを開催してくれることが、この地域に活気を生み、住んでいる人に元気を与えていると感じた。子供が遊べるコーナーなど多様な企画を用意することで来場する世代の幅も広がったので、市民センターの趣旨に合っていると思う。	
○	・地域の方々を招待してのイベントへ参画することで市民センターを中心に地域を理解し好きになっていき担い手へと変わってくれると思われる。 ・大学生のお手伝いの方がいることで、安心して活動ができ市民センターならではの活動ができるとおもう。	

評価の視点	評価	備考
○事業により参加者の意識、行動がどのように変化したか		
○	コロナ禍のなかでも、自分たちが楽しみながら地域に貢献できることがあることを実感する機会になったのではない。	
○	中学生達は地域の人の声がけで、また来年も頑張ろうと思い、おもてなしをしたいという気持ちが表れており、未来の町を担っていくのだと感じた。また、地域のために自分たちは役に立っているという自己肯定感を持てるようになっていく。	
○	ただ絵の描き方を学ぶだけでなく、画樹園を開くための準備をする中で、接遇研修も学び、イベントにいらした人との交流を図ろうとする意識・行動、達成感・充実感を味わい、より良いものを求めようとする意識・行動が生まれていると思う。	
○	イベントを身近な地域で自ら企画・運営することで、生徒たちの自主性や自信につながるプログラムになっていると感じた。	
◎	参加者の顔があまりみえなかった。	
○社会的波及効果は期待できるか		
○	本事業のような活動が市民センターで行われることで、子どもや孫に中学生がいらない地域住民にとっても、中学生がより身近に感じられるようになると考えられる。参加する中学生をいかにして確保するかが常に課題になると予想されるが、社会的波及効果は大きいのではない。	
○	コロナ禍の中で、地域の人も出かけられるこの場で、若者たちと交流することで元気をもたらしたのではない。	
○	自分たちの暮らすまちへの愛着を深め、今後も大事にしていこうとする意識から、新たな活動等の広がりや深まりが期待できると思う。	
○	これをきっかけに今後も交流を続けていくことで社会的波及は大きいと思う。	
◎	特定の学校の美術部が運営するプログラムになってしまっているため、学校や部活動を限定せず、この地域のより多くの子供たちがイベントの企画づくりや運営に関われるよう、募集段階での積極的な広報やより多様な部活動・学校を巻き込む工夫を続けることが必要だと思う。	
◎	鶴ヶ谷団地が目指す「支えあいのまちづくり」をもっとPRできればいいとおもう。	
その他の意見		
○	最初は参加者がいなかったものの、美術部や科学部の生徒が協力することで実現したという点は、他の地域にも参考になるのではない。	
○	コロナ禍のなか、大規模なイベントは忌避されるだけでなく、中学生がそれに主体的に参加することは難しい。一方で、市民センターを中心とする小規模なイベントのほうが、中学生も主体性を発揮して参加することができ、得るものも大きいと考えられる。	
○	宮城野中央市民センターの発表で、H30年から準備を進めたが最初はなかなかうまくいかなかった、というお話を聞き、ここまで来るのに大変なご苦労があったのだと思いました。 現地を見させていただいて、子供達が生き生きとして取り組んでいる姿に感動をしました。 学校、市民センター、地域が協働して企画していく事が必要で、まさにこれだと思い感銘して帰ってきました。	

※「○」は評価できる点、「◎」は改善に向けた提案

評価の視点	評価	備考
○参加者同士の交流及び地域住民・団体との協働が、学習の中で促進されていたか		
○	小学生と中学生の交流、保護者とおやじの会との交流、学校の先生の参加、また、他地域の子ども・保護者の参加交流など、巨大かるた大会の中でたくさんの交流と協働の場面が見られた。	
○	14回のミーティングを重ねて一つの企画を完成させる過程は参加者同士の交流を促進させるものになったと考えられる。また、企画の本番である「かるた大会」には、企画の中心となった中学生の通う中学校の先生や、親父の会の方々も参加しており、地域住民・団体との協働も促進されたと評価できる。	
○	<p>・「南光台をもっと元気に委員会2」は、8月に委員会の初顔合わせを行い、それ以降たっぷり話し合いの時間を取ったとのこと。近道をせずに、みんなが事業の主旨を共有し、子どもたちに委ねるところは委ね、それをサポートする大人たちの工夫を見ることができた。</p> <p>・おやじの会、南光台中学校の先生、中学のバスケ部、南光台小学校、そして南光台中学校の剣道部を中心とした8名の「南光台をもっと元気に委員会2」。当日、巨大かるた大会に参加してみて、関わった参加者約50名“全員”による協働事業であるように思えた。</p> <p>・地元を学ぶ事業に、まちの特長を「かるた」にするという手法は決して目新しい手法ではないが、それを巨大なかるたに仕上げ、地域の老若男女を集い、スポーツ的に開催するという発想が良かった。ちょっと前までの運動会のように、多世代交流が生まれているところが、特に好感が持てた。</p>	
○	「南光台をもっと元気に委員会2」をとおして、参加者同士の交流及び地域住民・団体との協働が、学習の中で促進されていた。次代を担う子どもたちのための交流の場、地域住民と児童生徒、およびその保護者との交流の場になっている。	
○	企画委員の中学生を中心に小学生、中学生、保護者、教職員や地域を巻き込んでの事業が活発に行われている。	
○	<p>・参加者同士の交流をしっかりとルールがつないでいた。</p> <p>・地域から声をかけられた中学生が小学生に声をかけることで繋がりができていた。参加されていた小学校と中学校の先生方活動に大変喜ばれていた。</p>	
◎	おやじの会、中学校の先生、バスケ部などの代表者にも、かるた取り大会に何かの役割があったらなお良いと思う。アットホームな雰囲気を持ちつつ、様々なカテゴリーの読み札が生まれるかもしれない。	
○地域活動への参画が可能となる事業内容・手法・学習プログラムとなっているか		
○	個々のカルタの内容が地域のことをよく表しており、その内容を聞き取るまでが一つの地域学習活動となり、また、カルタ大会を企画運営するプロセスと、カルタ大会を通して、さらに多くの参加者に個々のカルタの地域内容を知ってもらう学習の広がり、生まれ、さらに読み札の一覧を配布することにより、各家庭などへ地域理解が広がるプログラムとなっていた。	
○	地域「カルタ」を作成するにあたり、センター職員・子ども・学校が地域の方々から、広く歴史・情報収集を行い、地元しか知らない「カルタ」を作成したことは、高い評価ができる。	
○	事業内容は、小学生から大人まで楽しく地域のことを学べる内容となっており、地域活動への参画を広げる活動になっていたと考えられる。	
○	かるた作りの読み札の内容がまちの歴史やまつり、方言、伝説など多岐に渡っており、ネタの収集が、自分たちのまちを知る手がかり(プログラム)になっていると思う。	
○	<p>・南光台児童館と連携している。中学校の教員も参加しているなど地域活動への参画を深める手法が用いられている。かるた作成という内容によって、地域への理解が深められる。</p> <p>・かるたの内容は、ウォークラリーなどを通して集めた地域の情報に加え、仙台の方言や有名人。時事的なものなど自由な発想で広がりが見られる。</p> <p>・中学生が企画委員として、主体的にリーダーシップを発揮し、小学生をリードしている。</p>	

評価の視点	評価	備考
○	とても楽しい雰囲気にあふれているからた大会であった。中学生たちがかるたを作る上で南光台の様々な場所について話し合いを重ねたところがよく分かったし、ルールについても、参加者の年代や皆が楽しめるように考えて企画されているのが分かった。参加者も、子供から大人まで笑顔で楽しんでいた。	
○	地域の歴史や地域の特色を活かしての活動がみられた。また、子どもから大人も楽しんで参加できるようによく考えられた事業内容になっていると思いました。	
○	かるたの作成に合わせて一覧の作成をすることにより今後へのつながりになる。	
◎	かるた取りという競技を第一にするのもひとつだが、読み札の意味や背景などもプレー中に簡単に解説してもらえると、まちの特長などに理解が深まるのではないだろうか。	
◎	今回は剣道部・ジュニアリーダーの力を借りての実施のようであったが広く参加できる体制が大切だと思う。	
○市民センターが参加者の活動の場・居場所としての位置づけになっているか		
○	巨大カルタづくりと大会運営実施に向けて、市民センターに中心実行メンバーの中学生が集まり、センター職員の支援の中で、活動の場・居場所としてしっかり機能していた。	
○	ミーティングの回数から察するに、活動に参加した中学生にとっては気軽な活動の場になっていたと考えられるし、今後も積極的に利用することが予想される。こうした中学生のネットワークを軸に、来年度以降の新たな事業に展開していくことが望ましい。	
○	南光台市民センターが事業全体のフレームを作り、中身は子どもに任せる。そして、近過ぎずやや遠くから見守るというスキーム。市民団体、近隣の小中学校の生徒、先生、保護者が一堂に会する環境を上手に整えていると思う。	
○	参加する児童生徒にとって、市民センターが参加者の活動の場・居場所としての位置づけになっているといえる。	
○	複数の中学生の生徒たちが集まり、様々な意見を出し合える場、そして、中学生の考えを聞きながら助言を与えてくれる場所として市民Cは参加者がほっと息をつき、自分を出すことのできる居場所となっていると思う。	
○	市民センター事業で始まった委員会メンバーは進学し学校が違っても活動は続けられ、新たな仲間や部活の先輩も誘い活動の幅が広がっているとのことでした。	
○事業により参加者の意識、行動がどのように変化したか		
○	大会事後のふりかえりの会の中学生のことはを記録してくれたことは貴重な評価資料であった。そこから、主体的な社会参画の意識が育まれたことが明らかにわかった。それは、学校教育内などでは学習できづらいことであり、まさに社会教育の場としての市民センターの教育的役割が発揮できていることがわかる。	
○	中学生へのインタビューでは「仲間と協力して取り組むことの大切さ」や「企画する側の気持ちも分かるようになった」などの声が挙げられており、以前よりも他者への配慮などが出来るようになったと予想される。	
○	ふり返りのビデオの中で、「南光台をもっと元気に委員会2」のメンバーの多くが、 1. 参加者の立場で企画を考える大切さを学んだ 2. コミュニケーション能力がついた 3. 南光台のことを知ることができた ということ、参加して良かったこととして述べていた。 「巨大かるた大会」の実施は、南光台地区の“人とまちの魅力を探る”きっかけを作り、次代を担う子どもたちが地域住民との交流の場にもなっていることが伺える。	
○	事業により参加者の意識、行動がどのように変化したかについては残念ながら、聞き取りできていないが、南光台をもっと元気に委員会2に参加し、1年間活動することによって、参加者が地域への理解を十分に深めることができると考える。	

評価の視点	評価	備考
	○ 企画段階で何度もシミュレーションをしても、当日やはり予想できなかった動きもあったと思うが、皆で相談し臨機応変に対応していたと思う。実際に大勢の人を動かすときの難しさ、気を付けることも学べたと思うし、それが参加者の今後のコミュニケーション力のアップにつながっていくと思う。	
	○ 地域の良さ、課題などについて分析を行い、子どもたちの発想を生かしながら地域の発展や活性化につながる活動を企画・実施するとのことで、その成果が十分に表れていると感じました。	
	○ 事業に参画することで地域の力のなるという自信になっている。	
○社会的波及効果は期待できるか		
	○ 昨年度まで小学生だった実行委員のメンバーが今年度中学1年生になり、2年生を誘い、小学生がカルタ大会に参加し、年齢の広がりが生まれてきている。年度を越えて継続していくことにより、さらに小学校・中学校・高校と年代層の参加の広がりが期待される。 また、地域外からの保護者と子どもの参加者があったことも成果であった。その保護者は、当該市民センター職員の電話対応も大変親切ですばらしいとほめていた。市民の市民センターへの社会的な期待の好循環が生まれている。	
	○ 審議会の中では中学生へのインタビューが放送されたが、これは事業を振り返る上で非常に参考になった。欲を言えば、実際のカルタ大会の様子と合わせて一つの作品に仕上げ、市民センターのモニター等で常時放映すれば、地域の人々へのアピールも期待でき、さらなる活動者・参加者を集めるきっかけとなるのではないか。	
	○ 当日の「かるた大会」の参加者は60数名であり、大勢の参加者があつめられていることから、波及効果のある活動になっている。	
	○ 地域のことを理解することでより地域に根差した活動ができていくと感じます。	
	○ 学校とは違う場で活動することで地域に対しての意識が変わり交流することでお互いの存在への信頼感や達成感は今後の社会的効果は期待できると思われる。	
	◎ 「カルタ」の情報をセンターを中心に、各学校・各団体・商工会などに、A4判程度にまとめて配布・PRする機会を期待したい。	
	◎ 今後、読み札も公募などで、かるた大会への興味を広げる工夫があったら、なお良いと思う。	
	◎ イベントに参加した地域住民や団体から、「あそこにも知られていない場所があるよ。」とか「こういう言い伝えも残っている。」などという話がもらえたら、また新たな南光台の魅力が詰まったかるたが出来上がると思う。	
	◎ 地域のことを理解することでより地域に根差した活動ができていくと感じます。	
	◎ 今回は剣道部・ジュニアリーダーの力を借りての実施のようであったが広く参加できる体制が大切だと思う。	
その他の意見		
	— 南光台に事務所を開設して31年になりますが、大変地域のことが勉強になりました。	
	— 地域「かるた」の作成作業によって、次代を担う子どもたちのための交流の場、地域住民と児童生徒との交流という目的が実現できている、南光台をさらに活性化させたいという思いが実現できたと考える。小学生にとっては、地域を知ることが、小学校高学年での地域を知る学習につながっている。中学生としては、かるた作成のプロセスの中で、地域での職場体験の経験や地域におけるボランティア活動と本事業を結び付けたらどうであろうか。	

評価の 視点	評価	備考
—	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会のメンバーが子どもたちに向けて、待ち時間の間ゲームなど臨機応変に行っている様子が頼もしかったです。 ・企画委員の子どもたちをサポートしている市民センターの方のやさしさが感じられました。 ・後日、公運審で発表された、委員会メンバーの振り返りをみさせていただきました、みんなの嬉しそうに話している様子に視察させていただいてよかったですと思いました。 	
—	<p>コロナ禍に開催には大変なご苦勞があったかとおもわれます。ありがとうございました。</p>	